

内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の随筆が掲載されました。

(名大医学部学友時報 第739号 2011年8月22日発行)

人生
山あり谷あり

第7回 「狭い轍の跡」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授

いぐち ありひさ
井口 昭久

授業で、前列の女の子が私語をしていたので怒った。「何故私語をしたんだ。あれほどいかんといっただろう！何の話をしていたんだ？」丸い顔をしてトックリのセーターを着た女の子が伏し目がちに言った。「今先生が読んでいるエッセイは、前の授業でも聞いたよね、って話していたんです」私はうろたえた。

年を取ると、同じことを言うことが多くなる。

最近の大学では学生の面倒をよくみるようになった。大学へ顔を出さなくなったり、退学する学生が増えてきたからである。学生を自分の研究室へ一人づつ呼んで生活の状況を聞くのが例年の行事になった。深入りせぬように問診しながら問題のある学生を見分ける。

「何かバイトをやっているの？」「ユニクロでバイトしてます」「どこの？」「滝の水です」「兄弟は何人？」「二人です」「どうやって通学しているの？」「チャリとバスです」「お昼はどうしているの？」「お弁当です」「何かバイトやっている？」「ユニクロです」「どこで？」「滝の水です。サッキ聞かれました」

記憶の中の個人的な経験を保存している部分を「自伝的記憶」と呼ぶそうである。

自伝的記憶に関する実験は20世紀の初めイギリスの若い科学者ゴールトンによって始められた。彼はロンドンの市内を歩きながら目に入った物からどんなことを連想したかを書きとめた。

ゴールトンは何回も連想に関する実験をして以下の結

論を得た。ある言葉から連想される一連の言葉はいつも決まっていた。連想された語は、まるで役者たちが上手から出てきて、舞台を横切って、下手に引っ込み、舞台裏を走って、また上手から出てくるみたいだった。この繰り返しであったようだ。そして彼は結論を出した。

「私たちの心の道路には狭い轍の跡がついていて、その通りにしか動けない」

人は同じ状況になるといつも同じことを考える。思考はからくり人形のように回転するのだそうだ。

私が同じことを言うようになったのは、最近になって同じことをぐるぐる考えるようになったからではない。昔から私の思考は深い轍にとらわれて同じ軌道を回っていたのだ。

この頃同じことを言うようになったのは、言ったことを忘れてしまうからである。

年若い患者は優しい。何回でも同じ問いかけに同じ返事をしてくれる。

「変わった事ありませんか？」「変わったことはありません」「今日は御昼に何を食べましたか？」「うどんです」「運動していますか？」「一日30分は歩いています」「変わった事ありませんか？」「変わったことはありません」「今日は御昼に何を食べましたか？」「うどんです」